

# 個人情報とその管理について思うこと

学術情報基盤センター長 富田 佳宏

IT化の進展に伴って個人情報を含むデータが大量に収集可能になり、その保護やコントロールについての不安や危機感が、日常生活においても確実に募ってきており社会的な関心も高まっている。毎日頻繁に掛かってくる電話、多量のSPAM mailなどは、何らかの形で漏洩した個人情報によってもたらされたものが一因と言えよう。これは、一部に、ITの急速な進展に対してプライバシー関連法の整備が遅れていることに起因するとされ、今般このような状況を正常なものとし、個人情報の有効利用と保護を目的として策定されたのが、個人情報保護基本法制である。本法の4月からの施行に先立ち、企業、法人がその対応に多くの時間と労力を費やしている。インターネットのホームページを検索すると関連のサイトが数十万あることから、その関心の深さ、広がりが強く感じられる。また、情報コントロール・表現規制を危惧する観点から問題点を指摘しているのも多く、本法の制定までに紆余曲折があったことを物語っている。

個人情報とは、個人に関する情報であって、その情報を構成する氏名、住所、電話番号、メールアドレスその他の記述等により個人を識別できるものと定義される。また、その情報のみでは識別できない場合であっても、他の情報と容易に照合することができ、結果として個人を識別できるものも個人情報に含まれる。従って、これまで特段の配慮がなされていなかった各種情報が個人情報になる可能性がある。ごく最近に限定しても、数百万規模から数十に至る多種多様な個人情報の漏洩がニュース報道されていることは周知のことである。一度、対応を誤れば、直接的、間接的に、企業活動に対して回復不可能なダメージを被る可能性もある。外部からの不正侵入はもとより、内部的な要因によって情報が漏洩することも多く、この問題の根深さ、完全な解決の困難さを暗示している。個人情報を取り扱う関係者の情報セキュリティに対する意識のギャップの存在ならびにモラルの低下や各種機器の操作ミスなども情報漏洩や不適切な利用につながる。これを未然に防ぐためには、セキュリティポリシーの策定と、それに基付いたワークフローと手順書が不可欠であり、本学でも、鋭意取り組んでおり、本誌において、その説明がなされている。

ところで、大学における個人情報は多種多様であり、教育に関連した個人情報に限定しても、入学試験成績、入学後の各種講義の成績、卒業あるいは修了後の就職先ならびに社会的な活動情報など枚挙に暇がない。このような情報は、入学試験、カリキュラムならびに講義のあり方等を検討するために不可欠であり、ミクロには、個々の教育・研究活動のあり方の評価・検討に、マクロには、次世代の知の創造を使命とする神戸大学の教育・研究戦略の策定に資するところが極めて大きい。従って、個人情報に対する過剰な自己規制が、教育・研究活動を阻害し、神戸大学の更なる発展の妨げとならないように、法律に従った適正な手続きでもって個人情報を収集、管理、利用することが重要であると、強く感じる次第である。

私はこれまで2年半にわたり、神戸大学総合情報処理センター長ならびに新設の同学術情報基盤センター長を務めてきました。また、本年2月からは、新たに設立された情報管理室長を仰せつかっております。これまでの関係各位の学術情報基盤センターへの暖かいご支援に御礼申し上げますとともに、今後とも神戸大学における各種情報の管理に対してご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。